

短大特任教員教育研究業績書

平成 30 年 5 月 11 日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
近藤 正子	こんどう まさこ	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・ 講師 ・助教	男・ 女

担当科目名

身体表現Ⅰ、身体表現Ⅱ、人間関係指導法、保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習指導Ⅰ、保育実習Ⅱ、保育実習指導Ⅱ

学 歴

和暦（西暦）年 月	事 項	学位
平成6(1994)年 4月	奈良女子大学 文学部 教育学科 入学	
平成10(1998)年 3月	奈良女子大学 文学部 教育学科 卒業	学士(文学)
平成10(1998)年 4月	奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻 入学	
平成12(2000)年 3月	奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻 修了	修士(文学)
平成12(2000)年 4月	奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程複合領域科学専攻 入学	
平成18(2006)年 3月	奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程複合領域科学専攻 博士課程単位取得後退学	

教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
大阪リゾート&スポーツ 専門学校	平成15年4月～ 平成18年3月まで	専任講師「メンタルヘルス」「スポーツ心理学」「乳幼児心理学」「メンタルトレーニング論・実習」
近畿大学九州短期大学通信教育部保育部	平成15年4月～ 平成19年3月まで	非勤講師「教育心理学」「人間関係」
甲子園短期大学幼児教育保育学科	平成18年4月～ 平成20年3月まで	専任講師「体育」「保育内容「健康」」「身体表現」
甲子園学院高等学校	平成19年4月～ 平成20年3月まで	非常勤講師「体育(ダンス)」
畿央大学健康科学部	平成20年6月～ 平成22年2月まで	研究補助職員
大阪子ども専門学校（東京未来大学子ども心理学科通信教育課程大阪キャンパス）	平成21年4月～ 平成23年3月まで	非常勤講師「乳幼児心理」「教育心理学」「生涯発達心理学」「こころの理解」「対人コミュニケーション論」「子どもの認知と記憶」「パーソナリティの心理」「生理心理学」「比較行動学」
神戸常盤大学短期大学部	平成21年9月～ 平成22年8月まで	非常勤講師 幼児教育学科「体育Ⅱ」「体育実技・理論」、口腔保健学科「健康・スポーツ科学」
畿央大学	平成22年4月～ 平成29年3月まで	非常勤講師 理学療法学科「レクリエーション理論・実践」 教育学部現代教育学科「レクリエーション活動」
神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科	平成22年4月～ 平成29年3月まで	非常勤講師「身体表現」「保育内容の研究・表現(幼小)」「体育Ⅰ」
園田学園女子大学人間教育学部児童教育学科	平成22年9月～ 平成24年3月まで	非常勤講師「保育内容指導法健康Ⅱ」
近畿大学九州短期大学通信教育部保育部	平成24年4月～ 現在に至る	非常勤講師「教育課程総論」「人間関係」「健康」「教師論」
神戸常盤大学短期大学部	平成24年9月～ 平成25年3月まで	非常勤講師 幼児教育学科「体育Ⅱ」、口腔保健学科「健康スポーツ科学」
神戸常盤大学教育学部子ども教育学科	平成25年4月～ 平成28年3月まで	非常勤講師 「保育内容「健康」」

近畿大学豊岡短期大学通信教育部こども学科	平成25年4月～ 平成26年3月まで	非常勤講師「教育原理」
兵庫大学生涯福祉学部こども福祉学科	平成26年4月～ 平成29年3月まで	非常勤講師「こどもと健康」
小田原短期大学	平成28年4月～ 現在に至る	保育学科通信教育課程 専任講師 「身体表現Ⅰ」「健康・スポーツ実技」
所 属 学 会 等		
名 称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）
日本体育学会（体育心理）	平成10年4月～ 現在に至る	会員
大阪体育学会	平成10年4月～ 現在に至る	会員
日本バイオフィードバック学会	平成13年7月～ 平成16年3月まで	会員
日本健康心理学会	平成22年8月～ 現在に至る	会員
日本保育者養成教育学会	平成29年1月～ 現在に至る	会員
社 会 活 動 等		
名 称	活動期間	活 動 内 容
奈良市役所健康増進課講師（ボディワーク、健康に関する講義、体操指導、親子体操）	平成10年2月～平成15年3月	奈良市役所健康増進課が主催、もしくは市民グループの要請を受けて行われる健康増進事業の企画・実施を担当した。中高齢者を中心に様々な対象者に対して「健康（生活習慣病予防）」をテーマとする実技・講習、また幼児と母親を対象とした運動遊びや親子体操の指導を行った。この活動の目的は「市民の自主的な社会活動を援助するためのグループワークの提供」とされ、対象者から再度の要請を頂くほどに評価を受けていた。
社会福祉法人日本コイノニア福祉会地域子育て支援センター講師（親子体操、行事企画）	平成14年1月～平成15年3月	福祉法人がもつ幼稚園に併設されている子育て支援センターで母親の有志グループへの親子体操・ダンス講習の一部を企画・実施した。この活動の主な目的は「子育て中の母親の主体的社会活動の機会を提供する」ことであり、毎回多くの母親が出席し、積極的に活動を行っていた。親子の触れ合い体験や運動不足解消だけでなく、自主的な社会活動への参加による精神的健康への効果を期待するものであった。
担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等		
名 称	取得年月	取 得 機 関
中学校教諭一種免許（保健体育）	平成10年3月	奈良教育委員会
高等学校教諭一種免許（保健体育）	平成10年3月	奈良教育委員会
中学校教諭専修免許（保健体育）	平成12年3月	奈良教育委員会
高等学校教諭専修免許（保健体育）	平成12年3月	奈良教育委員会
「幼稚園教諭一種免許状」 「小学校教諭一種免許状」 の課程認定委員会における 教員資格認定	平成24年2月	神戸常盤大学、担当科目「保育内容健康」
研 究 実 績 に 関 す る 事 項		

代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1) 「子どものこころとからだを育てる保育内容「健康」」	共著	平成 20 年 4 月	保育出版社	第 2 章 伝統的民俗行事と健康について (13. 七夕 14. 月見 15. 七五三 16. その他の行事) 子どもの健康的な成長を促すことのできる保育実践力を養成するために考案された教科書的書。第 2 章では子供の健康的な成長への思いを神へ祈る日本の伝統的民族行事のその在り方を考える。後半を担当し、七夕, 月見, 七五三, お盆についてその起源や風習を詳しく説明した。 高内正子, 近藤正子他多数
2) 「事例と図解で学ぶ保育実践『子どもの心の育ちと人間関係』-人を育てるためのかかわりと援助-」	共著	平成 21 年 3 月	保育出版社	養育者や保護者、次世代の若者が「人とのかかわり」を軸にした幼児教育・保育実践へのイメージと気づきを得られるような理解しやすいガイドブックとなるよう編成された書。以下の 4 テーマを担当し、子どもの健全な人間形成にとって人生初期の情動コミュニケーションが重要であることを解説した。 「情動コミュニケーションと愛着の形成」「愛情遮断症候群」「依存と自立」「保護者の子育て支援の実際」 寺見陽子, 近藤正子他多数
3) 幼児教育における表現Ⅰ (理論的研究編)	共著	平成 30 年 1 月	三恵社	幼児教育における表現に関する専門書である。「領域「人間関係」に重要な身体性に関する理論的研究」を寄稿した。領域「人間関係」において、「身体」を通じたコミュニケーションの重要性を理論的に考察することを目的とした。幼稚園教諭の役割の一つであるモデルとしての身体と、他者との「身体的関わり」について考察し、これを授業で学生に教授するために、自他の身体への気づきを促す身体活動の有用性を示した。 崎浜聡, 近藤正子, その他 13 名
4) 幼児教育における表現Ⅱ (実践的研究編)	共著	平成 30 年 1 月	三恵社	幼児教育における表現に関する専門書である。「身体性に着目した『人間関係』指導法の授業研究ー自由に表現できる仲間環境をつくるー」を寄稿した。幼稚園教職課程のコアカリキュラムである「人間関係」の指導法について、「身体性」を用いた指導案の作成に必要な①「表現方法」、②「コミュニケーション」、③「イメージ」の三つの要素を体験的に気づく授業実践研究を行った。感想から、指導案作成の基礎的知見を得ることが示された。崎浜聡, 近藤正子, その他 13 名
(学術論文) 1) ストレッチワークが中学生の心身に及ぼす影響ーワーク時のボディコンタクト	単著	平成 14 年 3 月	奈良女子大学大学院人間文化研究科 年報 第 17 号 p. 357-369	ストレッチワークを一人もしくはペアで行なう際の BGM を用いる効果について、中学生を対象に実験的に検討した。中枢神経系活動(背景脳波)と自律神経系活動(心拍・呼吸), 気分覚醒度(UMACL)への影響を比較した結果, ストレッチにより精神的・生理的にリラックスすることが明らかとなり, 男子のみに

<p>及びBGMの有無に注目してー</p> <p>2) 青年期におけるストレス反応に関する調査研究</p> <p>3) 保育者に求められる身体表現力とは(1)</p> <p>4) 保育者に求められる身体表現力とは(2)-学生の意識調査と実技科目連携の試み-</p> <p>5) 身体内感覚に意識を向けるストレッチングワークの繰り返しによる主観評価の変化</p>	<p>共著</p> <p>単著</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>平成14年3月</p> <p>平成19年3月</p> <p>平成20年3月</p> <p>平成21年5月</p>	<p>奈良女子大学スポーツ科学研究年報第4号 p.62-68</p> <p>甲子園短期大学紀要第25号 p.71-76</p> <p>甲子園短期大学紀要第26号 p.125-132</p> <p>奈良女子大学スポーツ科学研究年報第11号 p.13-20</p>	<p>BGMのあるペアワークによるさらなる効果が認められた。</p> <p>大学生の精神的・身体的健康を測定する際に使用されているUPIを、中学生・高校生を対象に用いてこの時期の子どものもつストレス反応について調査・検討を試みた。因子分析の結果、「神経症傾向」「身体的反応」「社会的不適応」「無気力・無能感」「不機嫌・気分変動」「肯定的自己評価」の6因子が抽出された。また、各因子の学年及び性差について検討した結果、高校生により強いストレス反応が認められ、女子の方がその傾向が強いことが明らかとなった。近藤正子, 平井タカネ</p> <p>「上手さ」に焦点を当て、保育者に求められている身体表現力について考察し、保育者養成校における科目「身体表現」の目標課題の調査・検討を試みた。女子短大生を調査対象として幼児向けのダンスを「保育者らしく踊る」ことを課題とした発表を録画し、教育実習指導者2名に採点・評価をさせた。その結果、手足の伸びや大きな動き、リズム感などが上手く見える要因となっていることが明らかとなり、動きの視覚的フィードバックが外的課題への気づきと強い意識付けを促すことが推測された。</p> <p>「保育者に求められる身体表現力」について学生や現場の教員がどのように考えているのかについてアンケート調査を行った。その結果、学生の6割が「環境としての保育者の身体」、3割が「教育的視点」が必要と答えた。特にI回生は「～になる」等の保育者自身の表現力、II回生は子どもが表現できる環境構成力が必要であるとする傾向があった。現場の意見も若い教員ほど現場での実践力を求め、ベテラン教員が環境構成力を求めていることが認められた。また、現場イメージをもたせる為に「まとめて考える」体験をもたせようと、造形・音楽科目と連携する並行した授業展開を試みた。短期間ではあったが、学生の表現活動に対するモチベーションと実技科目に取り組む姿勢を向上させることができた。並行する授業同士の連携と2年間を通した連続した授業展開が学生の実技科目に対する学びの質を向上させることが示唆された。近藤正子, 松實輝彦, 安田伸子</p> <p>リラクゼーションを目的として身体内感覚に意識を向けるスタティックストレッチングワークの経験が主観的感覚に及ぼす影響とその反応の個人差や繰り返すことの効果について、ワーク前後に測定したUMACLとMCL-3の得点の変化から考察を試みた。結果、ワークによって気分的な覚醒度とポジティブ感情の上昇、緊張感の低減が認められたが、被験者によってその傾向が異なることや経験を積むことによる反応の変化が明らかとなった。本ワーク</p>
--	---	---	--	--

				における主観的なリラックス効果には沈静的もしくは覚醒的な状態がもたらされることが推察された。
(その他) (学会発表) 1) 脳波からみた Stretching 効果について	共同	平成 15 年 7 月	日本バイオフィードバック学会第 31 回大会 (於大阪産業大学)	身体内感覚に意識を向ける動作としての Stretching を課題とするワークのリラクゼーション反応について検討を試みるとともに、ワークによる主観的 relax 感に関連する中枢神経活動について考察を試みた。7 名の被験者が 20 回の測定に参加。結果は、1) Stretching 後に右前頭と左後頭でリラクゼーション反応を示す α 波の増大が認められた。2) 左後頭(P3) までの α 波の増大が主観的 relax 感と関連することが明らかとなった。3) 熟練者ではワーク中に前頭 $\theta 2$ 波の増大(課題への注意集中の指標)が現れ、経験によるワークの質の変化が表れることが推察された。近藤正子, 平井タカネ
2) 背景脳波の変動パターンからみたストレッチングワークのリラクゼーション効果	単独	平成 19 年 9 月	日本体育学会第 58 回大会 (於神戸大学)	身体内感覚に意識を向ける動作としての Stretching を課題とするワークのリラクゼーション効果の個人特性について検討を試みた。成人女性 7 名が 20 回の static stretching ワークに参加。結果は、1) $\alpha 2$ 波が増大する群と $\alpha 2$ 波が減少する群に分けられた。2) 主観的リラックス感には変化はなく、覚醒度得点と背景脳波との相関が認められた。3) 課題への慣れによって背景脳波のパターンが変化する傾向がみられた。
3) 背景脳波の変動パターンからみたストレッチングワークのリラクゼーション効果(2)	共同	平成 20 年 9 月	日本体育学会第 59 回大会 (於早稲田大学)	20 回の stretching ワークの主観的リラクゼーション効果と背景脳波との相関の検討を試みた。ワーク後は沈静もしくは覚醒的な効果を感じ、特に $\alpha 2$ 波増加群は「落ち着いた」 $\alpha 2$ 波減少群は「目が覚めた」リラックス感を示す傾向があった。脳波については両群ともに α 波成分の変動パターンに影響を受けており、ワーク中 $\theta 2$ 波と満足感、ワーク中 δ 波と α 波成分のバランスと主観的覚醒度が関連していることが推測された。20 回を通してほとんどの被験者が 3 回目には「慣れた」8 回目前後に「自分なりにできる」と記し、脳波も変化する傾向がみられ、確かなリラクゼーション効果を得るためには一定の経験を必要とすることが窺えた。またワーク中の「身体(筋)への集中度」がリラックス感を得るための主観的指標であることも示唆された。近藤正子, 荒木雅信
4) ストレッチングワークの心理的リラクゼーション反応	単独	平成 21 年 8 月	日本体育学会第 60 回大会 (於広島大学)	身体内部に意識を向け“心地よい痛み”を手がかりに全身の筋を伸展させる身体運動であるスタティックストレッチングに注目し、その心理的リラクゼーション反応について考察を試みた。成人女性 7 名(22~31 歳)に 20 回のストレッチングワーク(20~30min)後にアンケートとともに自由記述を求めた。

5)「リラックス」の認知に関する研究	単独	平成22年 9月	日本体育学会第61回大会（於中京大学）	<p>ワーク後の主観的心理指標を得るためにその内容を次のように分類した。ワーク後の気分について（気分の良さ・リラックス感・覚醒度・安寧・満足感・やる気）、ワーク後の体調について（身体状態・体調の良さ・身体感覚（空腹感・温感等））、ワーク課題に対する感想（満足感（出来・集中度）・快感度・慣れ・外乱・時間感覚）、その他（ワーク中の気分の変化・ワーク後の時間経過に伴う変化・ストレッチの効果について）</p> <p>スポーツインストラクターを養成する専門学校に通う生徒273名を対象に「リラックスしている」とはどのような状態だと思いますか」への記述から「リラックス」の認知に関する基礎的調査を行った。記述内容は、安定感（落ちついている、穏やかなど）、眠気（寝ている、眠いなど）、筋弛緩（体の力が抜けているなど）、無の状態、快感情（気持ちが良い、楽しいなど）、ストレスの緩和（ストレスがないなど）に分類された。特に筋弛緩や無の状態を述べた者、「自然体」や呼吸・心拍数など独特な表現をする者には競技経験の長い生徒や高い実績を持つ生徒に多くみられた。また、経験競技内容（open skill, closed skill, 武道系）により「リラックス」観が異なる傾向が認められた。</p>
6) 心身の快適性評価に関する調査研究	共同	平成23年 9月	日本健康心理学会第24回大会（於早稲田大学）	<p>リラックスに関する自由記述から抽出した言葉から、リラックス感に関する26項目のアンケートを作成し、スポーツインストラクター養成専門学校生199人に実施した。スポーツ経験が10年以上もしくは全国レベルの大会参加経験をもつ生徒をスポーツ熟練者群（n=103）、それ以外を非熟練者群（n=96）として、それぞれで因子構造を比較したが、ここでは明らかな差を認められなかった。そこで、両群において同じ項目を持つ因子を構成することができるかを検討するために、Kanoら（2000）の方法を用いて因子分析モデルの適合度の観点から検討した結果、9項目で1因子を構成できると確認した。また、熟練者と非熟練者とに共通する項目を選択する過程から、群の特性によって「リラックス感」の構造が異なる可能性が示唆された。本研究で採用したリラックス感尺度の平均得点と「心の状態」「体の状態」「リラックス度」との相関係数を求めたところ、両グループともに、すべてに高い正の相関が認められた。近藤正子、佐久間春夫</p>
7) 保育者養成校スクーリングにおける保育内容「表現」科目間連携の	共同	平成30年 3月	日本保育者養成教育学会第2回研究大会（於共立女子大学）	<p>本研究では「表現」実技科目の目的意識を共有することにより、学生の学びの質向上を目指すと共に、幼稚園教育要領で求められる「表現」を総合的に教授できるかどうかを検討した。</p> <p>方法として、振り返りシートの自由記述についてテキストマイニングソフトKHcoderを用いて分析を行</p>

<p>可能性(1) – 「身体表現Ⅰ」「身体表現Ⅱ」の振り返りシート分析から –</p> <p>8) 保育者養成校スクーリングにおける保育内容「表現」科目間連携の可能性(4) – 「音楽表現ⅠA」「音楽表現ⅠB」の振り返りシート分析から –</p>	<p>共同</p>	<p>平成30年 3月</p>	<p>日本保育者養成教育学会第2回研究大会(於共立女子大学)</p>	<p>った。表現科目における「身体表現」の独自性として、遊びを通じた学び、ペアやグループでの活動、新しい人間関係の構築、身体の言語性、遊具や用具を用いた活動が挙げられた。連携科目を通じた学生の学びについては、それぞれの特性がばらつきとしてみられるが、総合すれば互いに補てんし合えていた。それぞれが「得意」とする部分を認識し、さらなる科目特性を生かし、互いに補い合うことで、「表現」実技科目としての更なる質向上につながるのではないかと考える。近藤正子、木戸貴弘</p> <p>本研究では「表現」実技科目の目的意識を共有することにより、学生の学びの質向上を目指すと共に、幼稚園教育要領で求められる「表現」を総合的に教授できるかどうかを検討した。方法としては、振り返りシートの自由記述についてテキストマイニングソフトKHcoderを用いて分析を行った。その結果、学生の学びとして「保育的配慮」、「アンサンブルにおけるタイミングや響きのバランス、仲間と創り上げていく難しさ」、「人前での弾き歌いのため積極的に練習に励む姿勢と今後の継続的学習の必要性の実感」が窺えた。連携については学生の学びの特性にばらつきはあるが、総合すれば互いに補填し合えていた。木村文子、萩原恵里、福田明子、<u>近藤正子</u>、小松原祥子</p>
<p>その他 (表彰等)</p>				